鏡梁を用いる和小屋組の形成と変容について

—庄内地方の民家を事例とした検討—

STUDY ON THE DEVELOPMENT OF THE ROOF STRUCTURE EMPLOYING KAGAMI-BARI

—Examination of residential structures in Shounai region—

御 船 達 雄*

Tatsuo MIFUNE

Kagami-bari is a roof structure style widely used in Shounai Region, where a small beam directly supports the ridge beam. First, the area of distribution and the various nomenclatures for the style were surveyed. The process of building extensions to the Abumi-ya (a sea merchant family's office and residence in Sakata) was analyzed as a study case for dating the periods when Kagami-bari was introduced into townhouses. Then, examples of Kagami-bari in surveyed structures were compared to clarify how this style spread throughout the region.

Keywords: Folk House, Locality, Shounai Region, Decorative details of the front façade,
Roof structure, Kagami-bari

民家、地域性、庄内地方、正面装飾、小屋組、鏡梁

1. 問題意識と鏡梁の定義

民家の和小屋組は、水平梁と、登梁や投掛梁とを各々区分し、水平梁と束を組み合わせた小屋組を、一般に「和小屋組」で括ることが多い。しかしながら、この「和小屋組」には、実際には各地で様々なものが見受けられ、少なからぬ地域性がある。けれどもその地域性や発展過程は、存外に明らかでないといえるだろう。

山形県域や新潟県北部域には、鏡梁（カガミバリ）¹を用いる和小屋組が一般的なものとしてある。これは、通常の和小屋が束で棟木を支えるのに対し、鏡梁という小梁で棟木を支えるもので、管見の限り他にほとんど見られない地域性の強い小屋組形式である²。この小屋組は高橋浩治氏の町家研究³に若干の記述があるが、研究の対象になる機会は、これまでほとんどなかった。本稿では、かくなる棟木を支える小梁を「鏡梁」と定義し⁴、実地調査に基づいて分布域や名称の概要を明らかにする。そのうえで鏡梁の採用過程と小屋組の変遷について考察を行い、和小屋組の地域性を考える際の一つの資料⁵としたい。

2. 分布域と名称について

まず鏡梁の分布域と呼び名について、はじめに展望しておきたい。分布域の確認調査は、山形県内を中心に秋田、新潟県内の、市町村

役場所在地付近の民家で、鏡梁の存在が確認できるか否かを判断した⁶。これによって作成した分布域を図1に示した。ここから置賜地方を除いた山形県の北部域と、新潟県北部の一部に分布していることがわかる。鏡梁を採用する割合を定量的に判断するのは難しいが、なかでも山形県庄内地方で特に高密度に見ることができる。

鏡梁の名称について、市町村史等の公刊資料に見えるものでは、明治10年(1877)に参成学校(鶴岡市内)を建築したさいの「参成学校材木横簿」⁷に、「鏡指」の記述がある。名称を記した史料はこの記述がもっとも古い。また遺構では後述する菅原家(山形県遊佐町/昭和14年頃)の小屋束に、「鏡小梁下」の墨書を確認できた。

鏡梁は現在に至るまで用いられているので、大工からの聞き取り調査も実施した。調査は14人⁸からおこない、少なくとも、カガミコバリ(鏡小梁)－3人、カガミバリ(鏡梁)－6人、ムナギコバリ(棟木小梁)－3人、カガミザシ(鏡指)－1人、の4種の呼び方がある⁹ことがわかった。このほか鶴岡市内在住の富樫新三氏による屋根工法書には、挿図に部材名として「鏡差」と記される¹⁰。

以上から、名称は大工によって少なからず異なるが、カガミを用いるものが、大勢を占めていることが知られよう。なぜカガミかは聞き取りで明確な答えがなく、民俗語彙に近い。これ以上の検討には資料がないが、高橋浩治氏によれば、鏡梁はカガミザシと呼ばれ、

本論文は、1998年の日本建築学会大会学術講演で発表した内容に、新たな知見を加え論述したものである。

* 助和歌山県文化財センター 技師・工修

Center for Cultural Properties in Wakayama Prefecture, M. Eng.

カガミとは「広く平滑な面を意味する言葉であり、太く立派な事を強調している言葉であろう」¹⁾と推測している。建築用語に鏡天井や鏡板があるように、意匠性の強い梁を指す言葉としてカガミが使われるようになったと考えるのは、確かに妥当と思われる。

3. 鏡屋の増築にみる鏡梁の採用過程

酒田は日本海側の代表的な港町で、北前船そして最上川舟運によって大いに繁栄した。国指定史跡の旧鏡屋（あぶみや）は、酒田市街にある商家遺構である。この鏡屋惣右衛門家は代々回船問屋を営み、酒田三十六人衆の筆頭であった。酒田の本町通りに構えられた屋敷地に建つ主屋は、桁行 24.9m、梁間 13.8m、切妻造、石置杉皮葺屋根、妻入の大型町家である。主屋正面側には店舗棟が接続する。主屋は弘化2年（1845）の大火直後に再建されたと考えられているが、この町家の正面妻壁に鏡梁が使われている。しかしながら後述のように、正面妻壁部分は後世の増築部である。ここではその増築過程を検討¹²⁾することで、町家における鏡梁の採用過程について手がかりを得ておきたい。

工事報告書¹³⁾によれば、主屋は建築当初、中央部分である広間、

仏間、茶の間の部分が建てられ、後に下手の板の間、奥の間部分が増築された。続いて上手の座敷が増築され、また下手の台所も増築されて修理前の規模となった。この時期は幕末期とされている。

ここで問題となる鏡梁を用いる正面妻壁は、増築された上手座敷部分にある。この上手座敷の大棟は、増築のため棟木一本分、棟が高く造られている。上手座敷は八畳間二室よりなる続き間の書院座敷で、正面側に幅1間の土縁が沿う。妻壁は座敷と土縁境の柱筋上にあり、桁行梁をせがい状に造り妻壁を1尺1寸持ち出す。土縁は下屋庇形式で造るので、大屋根正面側はこの妻壁で終わる。

妻壁は上屋梁間5間で、せがい状に腕木で支えられた上屋梁を含め、5段に梁を重ねて造る。その最上段が棟木を支える鏡梁で、3本の束によって支えられている。各梁の間は漆喰塗の土壁である。鏡屋の小屋組で鏡梁を用いているのは、この部分のみであって、内部小屋組は、増築部・当初部ともに二重梁や束立のみである。下手（背面側）妻壁も二重梁だが鏡梁は用いていない。

この正面妻壁より2間、下手に引き込んだ位置にある小屋組が、建築当初の妻壁である。ここは広間・座敷境にあたる。この小屋組は桁行梁に上屋梁を掛け、上屋梁上に単に束立てして母屋、棟木を

図1 鏡梁の見られる市町村

写真1 鏡屋の正面妻壁（増築部）

写真2 鏡屋の小屋組内に残る当初妻壁部

図2 鏡屋の増築にみる妻壁形式の変化

座敷増築時 幕末から明治初期

支える形式である。建築当初部分である広間から延びる母屋、棟木は、この筋から正面側へ3尺3寸のところで終わっており、増築部の母屋、棟木はこの筋から改めて継がれて¹⁴いる。建築当初の母屋、棟木の表面は風食しており、この部分がかつて切妻屋根のケラバであったことがわかる。当初小屋束の正面側（外側）には、風食がなく多数の釘跡があり、これらは壁板を留めた釘と見られる。また小屋束側面には、小舞下地を留めた竹釘痕跡もある。これらから復原すると、当初の妻壁は鏡梁を用いず束立のみの小屋組に、土壁を塗り、さらに大壁状に板を張る形式¹⁵であったことが判明する。

座敷部の増築は、報告書では「第二期 幕末頃」とされている¹⁶が、ここで再確認しておこう。まず座敷部で使用している釘はすべて和釘であり、少なくとも明治時代中期以前であることは確実である。当家に伝わる家相図には安政2年（1855）¹⁷と文久元年（1861）¹⁸のものがあるが、両者には座敷増築前の主屋が描かれている。このうち前者には座敷に相当する位置に懸紙があり、その懸紙に桁行2間半の規模の座敷が描かれる。この頃に座敷を増築する計画が立てられたようであるが、後者ではまだその座敷は建っていない。一般的に明治10年代には洋釘が用いられるようになるので、これらから鑑屋は1860年頃から1880年頃までの20年程の間に座敷が増築され、その際に鏡梁が採用されたと考えることができる。

以上から、弘化2年（1845）の大火直後に再建された鑑屋は、座敷の増築のさい、妻壁に鏡梁が採用されたことが知られる。鑑屋は酒田屈指の回船問屋で、かつ筆頭を務めた三十六人衆は江戸時代に名字帯刀を許され、町政に大きな役割を果たした重職である。このため主屋に経済的な理由で、建築当初は鏡梁を用いなかったとは考えにくい。よって鑑屋で鏡梁を採用した幕末から明治初期頃が、鏡梁の形成時期にあたるのではないかと考えられる。

4. 鏡梁の意匠性と構造の関係および近代農家遺構での変容

鏡梁の形成について考察したが、以下では筆者が調査した遺構¹⁹をもとに標記について検討する。要点をまとめたのが表1である。

表1 調査遺構の小屋組形式

No	家名	所在地	建築年	建物種別	屋根(現状)	屋根材変更の有無	小屋組変更の有無	大屋根梁間	軒高	屋根勾配	妻壁・小屋構造	内部小屋組構造	桁行繋ぎ材	その他
1	鑑屋	酒田市中町	弘化2年	町家	切妻杉皮葺	無	正面側増築/幕末頃改造	7間	10.7尺	4.2寸	重ね梁4段、鏡梁	束立、貫通し	桁行梁、貫	史跡
2	石名坂家住宅	鶴岡市加茂	明治2年	町家	切妻杉皮葺	無	旧主屋を明治2年に組替	3間	14.2尺	3.3寸	重ね梁1段、鏡梁	束立、鏡梁併用	なし	登録文化財
3	石垣家住宅	遊佐町宮田	伝明治14年	農家	切妻瓦葺	無	無	6間4尺	12.5尺	6.0寸	重ね梁6段、鏡梁	重ね梁6段、鏡梁	なし	
4	青山家住宅	遊佐町青塚	明治23年	漁家・農家	切妻瓦葺	無	中門部増築/明治40頃	6間3尺	13.0尺	5.5寸	重ね梁5段、鏡梁	重ね梁5段、鏡梁	桁行梁	重要文化財
5	金野家住宅	遊佐町当山	伝明治30年	農家	寄棟トタン葺	杉皮→トタン(昭和30頃)	無	5間3尺	—	—	なし	束立、鏡梁	桁行梁	
6	梅地家住宅	遊佐町吹浦	明治後期	町家	切妻瓦葺	杉皮→瓦(昭和40頃)	無	4間3尺	—	4.5寸	束立、塗り込め	束立	桁行梁	
7	佐藤家住宅	酒田市勝保間	明治41年	農家	寄棟瓦葺	無	無	7間4尺	13.6尺	6.0寸	なし	束立、貫通し、鏡梁	桁行梁、貫	
8	伊藤家住宅	酒田市宮海	大正期	漁家	切妻杉皮葺	無	無	5間2尺	10.5尺	4.0寸	重ね梁4段、鏡梁	束立、貫通し、鏡梁	なし	
9	池田家住宅	遊佐町藤崎	大正末期	町家	切妻瓦葺	無	無	4間	12.7尺	5.8寸	クインポスト・鏡梁	クインポスト・鏡梁	桁行梁、筋違	
10	菅原家住宅	遊佐町樽川	伝昭和14年	農家	寄棟瓦葺	無	無	6間5尺	12.9尺	7.6寸	なし	重ね梁、束立、鏡梁	桁行梁、貫	
11	高橋家住宅	遊佐町八日町	昭和33年	農家	寄棟瓦葺	無	無	5間3尺	—	—	なし	束立、貫通し、鏡梁	桁行梁、貫	

No.2石名坂家住宅については、川崎和彦編『石名坂家住宅保存修理工事報告書』石名坂康夫刊、平成11年3月、を参考とした

鏡梁の形成時期にあたると見られる鑑屋では、正面妻壁のみ鏡梁があり、背面妻壁や内部小屋組にないので、鏡梁は意匠のため用い、構造的機能はなかったと考えられる。妻壁の各梁の太さは5寸5分と「梁」としては太くないが、鏡梁に至るまで幾段にも梁を重ねることで、正面妻壁を飾っている。実見しただけで調査に至っておらず表1にないが、酒田や鶴岡市街、遊佐町内の町家遺構では、鑑屋のように正面側のみ鏡梁を用いるものが良く見受けられる。中には大正末年頃建築の町家、池田家（No.9、写真3）のように、正面妻壁に鏡梁とクインポスト・トラスを組合せたものもある²⁰。鏡梁は明らかに一手間掛かる贅沢な構法で、妻面を豪華に見せる意図が強く感じとられる。このように町家建築で見えていく限りは、鏡梁に構造的機能は少なく、主に意匠のために用いられたと推察される²¹。

しかしながら町家建築以外では、鏡梁は必ずしも意匠のためだけではないようである。庄内地方の近世農家は寄棟造茅葺屋根から、近代に瓦葺へとしだいに転換（新築・建替え）した。瓦葺で造られても茅葺と軸組構造に大きな変化はないが、小屋組は又首から和小屋組に変わる。この近代の瓦葺農家建築の中には、町家における鏡梁の意匠的使い方とは裏腹に、まったくの見え隠れとなる小屋内部にまで、鏡梁を用いるものがある（No.3, 4, 7, 8, 10, 11）。また町家の石名坂家住宅（No.2）でも、一部の見え隠れにも鏡梁を用いる。大工諸氏からの聞き取りでも、意匠であるとの答えと同時に構造強化をあげる人もいた。確かに、鏡梁は渡り肥仕口で棟木と組み合い、単に棟束で支えるより棟木は安定して納まるといえる。

このように見えにくいところに鏡梁が使われることは何を意味しているか、以下の二点の要因を考えることができよう。

- 構造的機能の発揮が期待され採用されたと見る考え。
- 構法として形式化・定型化し、当たり前のものとして鏡梁を使ったと見る考え。

上記の点とその変容を検討すべく、次の4棟で小屋内部での鏡梁の用いかたを見ていく。これらは代表例として客観的に選別したものでないが、詳細な構造調査を実施し、なおかつ建築年代が明らか

石垣家梁間断面図
(No. 3/明治 14 年)

青山家梁間断面図
(No. 4/明治 23 年)

佐藤家梁間断面図
(No. 7/明治 41 年)

菅原家梁間断面図
(No. 10/昭和 14 年)

図 3 4 棟の梁間断面図

0 10m

写真 3 鏡梁とトラスで正面妻壁を造った例

写真 4 石垣家住宅 (No. 3) の上手妻壁

写真 5 青山家住宅 (No. 4) の小屋組内の鏡梁

で、上記に対し時系列にのせて検討できる好個の事例である。

石垣家住宅 (No. 3) は明治 14 年 (1881) に建築²²された。当家は近隣屈指の大地主であった家である。切妻造棧瓦葺の大屋根を支える小屋組は、6 段にわたって梁を重ね、鏡梁で棟木を支承する。この小屋組は両側面の妻壁のみならず、見え隠れの小屋内にも同様のものを用いる。注目したいのは、小屋貫や桁行梁などの、桁行方向の繋ぎ材がまったくないことである。母屋と棟木が、唯一桁行方向を繋いで、小屋組同士の転びを防いでいる。

重要文化財の青山家住宅 (No. 4)²³は、北海道のニシン漁で財を成した当家が、明治 23 年 (1890) に郷里庄内に建築した切妻造棧瓦葺の豪邸である。石垣家と良く似た鏡梁を用いる小屋組²⁴で、両妻壁と内部小屋組はともに同じものを用いる。しかしながら石垣家に対して、桁行梁が入っている点に違いが見られる。最下段の梁上には 4 通りに桁行梁を欠き込んで載せ、その一段上の梁上にもダボを植えて 4 通りの桁行梁を通して。石垣家と比較すると、明らかに桁行方向の構造強化をねらっていると考えることができる。

明治 41 年 (1908) 建築²⁵の佐藤家住宅 (No. 7) は、寄棟造棧瓦葺である。したがって鏡梁は意匠としての見せ所が全くない。当然屋根裏に入らないと、鏡梁を使っているかどうか分からない。小屋組は前出 2 棟とは異なって、梁を重ねず、高く束をさしあげ 2 段の小屋梁を支え、ここから順に繋梁を架けて母屋を支えるものである。束には 6 段の小屋貫がある。桁行梁 (中引梁) は小屋梁を欠き込み、棟通りに一本が入っている。注目されるのは上部 2 段の小屋梁で、この二重梁の上梁は、母屋や棟木を支える訳でなく、あえて見るなら棟束を補強する役割があるのであろうか。これが鏡梁かどうかは不明であるものの、この通りの小屋組のみならず、各通りの小屋組毎に入っており、意識的に採用された構造であることは確かである。一般的には小屋梁上から束のみで棟木を支えるところに、母屋を支えない小梁が入るのは、鏡梁の影響と考えられる。

昭和 14 年 (1939) 建築²⁶の菅原家住宅 (No. 10) は、寄棟造棧瓦葺で、やはり鏡梁は意匠としての見せ所がない。小屋組は梁を重ねる小屋組と、佐藤家で見られた貫に頼る小屋組を併せたような構造をとっている。下から 4 段目の母屋の高さまで束立てし、その上に 3 段の梁を重ねる。4 通りの桁行梁とともに、5 段にわたり貫が入り、格段に小屋組は強化されている。また小屋組の最下段には火打梁が入っている。なお鏡梁は各通りの小屋組に入るのではなく、一間毎に束立てと鏡梁が交互に用いられている。

以上の小屋組内部に鏡梁を用いる近代の農家遺構 4 棟を通してみると、小屋組は桁行方向の構造強化とともに、単に梁を重ねる構法から脱却して、貫を併用する方向に向かったことがわかる。小屋貫

の導入によって、梁間方向に長大材の必要な梁を重ねる構法から、構造としても強く、比較的材積の少なくて済む小屋組へと変容したことが読みとれる。しかし小屋組は変容しつつも、鏡梁は用いられ続けている。明治前中期の石垣家 (No. 3) と青山家 (No. 4) を見ると、鏡梁を使う要因は前述 (b) が強いように思われる。しかしながら菅原家住宅 (No. 10) は一間毎に鏡梁と束立てを交互に用いるので、大工達の意識としては (a) が強かったと思われる。これをもって (b) から (a) へ意識が変容したとは、検討遺構数が少ないので即断できないが、いずれにしても一つの地方的特徴をなすに至るまで、鏡梁が当地方に定着したことを意味していよう。

5. 試論としての形成と普遍化の過程

前節の近代の農家は、瓦葺でいずれも規模が大きく、見え隠れにも鏡梁を用いるところが共通する。町場と在郷農漁村の関係から、鏡梁の形成と普遍化過程について以下に試論的に考察してみたい。

鏡梁は最も古いもので幕末～明治初期増築の鍍屋の妻壁にみられた。鍍屋に代表されるように、酒田や鶴岡の町家は妻入が主²⁷で、現在でも切妻妻入町家の町並みを見ることができる。このような切妻造、妻入形式の民家の場合、いうまでもなく妻壁は外部意匠の見せ所の一つである。この正面妻壁を飾るために、梁を幾段にも重ねる表現が発達し、その行き着いた結果として、棟木までも梁で支える鏡梁が出現したのではないだろうか。この形成過程は明らかではないが、鏡梁は妻入町家が建ち並ぶ地方であってこそ、出現を見た独特の小屋組であろうとまずは推測できるのである。

江戸時代を通じ庄内地方の在郷農漁村の民家は、茅葺屋根の中門造が一般的であった。この場合、屋根型は寄棟造、小屋組は又首構造²⁸である。明治時代前期までの在郷農漁村では、和小屋組は土蔵や板蔵以外に用いず鏡梁を使う素地はなかった、とみてよいだろう。

前出の石垣家住宅 (No. 3) は、明治 14 年に近隣で最も早く瓦葺で建てられた²⁹。建物は平入で妻入町家とは異っており、平入農家の妻壁には、外部意匠の見せ所としての大きな働きはない。しかしながら石垣家では、鏡梁を用いた妻壁と内部小屋組が造られたのである。この内部小屋組に、桁行方向の繋ぎ材が全く見られないのは、在郷でそれまで用いた茅葺屋根の又首組を、当時町場で使われていた町家妻壁の正面立面に見える小屋組形式に単純に置き換えたため、ではないだろうか。近代在郷農漁村において主屋が茅葺から瓦葺へと転換していく過程のなかで、又首組に代わって、町家妻壁の、梁を重ね鏡梁で棟木を支える和小屋組を引用したのではないかと考えられるのである。それがやがて小屋組の改良とともに、棟木を支える構法の一つとして、鏡梁が大工たちの間に、定着し形式化したと推測できる。現時点で論拠となる資料がなく試論の段階であるが、地域性あふれる和小屋組は、このようにして庄内地方や新潟県北部に定着していったのではないだろうか。

一般的な構造の発展としては、例えば差鴨居や大黒柱のように、まず構造的な課題の克服のためにその構法が採用されたのち、次第に形式化・意匠化する。前述試論では鏡梁はこの逆をたどったことになる。これは本稿で検討した範囲で確認できる最古の鍍屋においてすでに意匠化されているためだが、この前段階に、構造的な課題（例えば耐震や耐雪）の克服策として鏡梁が使われだし、それが鍍屋の時点ですでに形式化していた可能性もある。鍍屋以前の遺構が

現在のところ見当たらないので、この点については今後の課題としたい。

6. まとめ

本稿ではまず鏡梁の分布域を確認し、その名称についてもいくつかあることを調査に基づいて述べた。つぎに酒田の豪商鍍屋における、江戸時代末期から明治時代初期にかけての増築過程から、鏡梁が妻壁に採用された過程を検討した。これによって鏡梁の形成時期をこの頃であると推測した。

また見え隠れでも鏡梁を用いている農家遺構の小屋組の比較検討から、小屋組構造の改良と、鏡梁が確実に定着していく様を明らかにした。加えて試論であるが、それまでの分析をもとに、形成と普遍化の過程を推測した。

以上の検討のうえでも、なお鏡梁の発生地域や、その伝播の過程、全国域での位置づけ等についてさらに検討が必要であるが、これらは今後の課題として、継続的に調査研究を行っていきたい。

謝辞 調査では、酒田市教育委員会、(株)ワタケン、調査した家のご家族、大工の方々、そして家や大工の紹介と調査交渉において、高橋石雄氏に大変なご協力を頂きました。記して御礼申し上げます。

註及び参考文献

- 1 後節調査結果にみるように、名称は必ずしも一致していないが、本稿では便宜上「鏡梁」と呼称する。
- 2 東北 6 県及び新潟県の民家緊急調査報告書では、鏡梁は報告されていない。しかし妻面に梁を重ねて妻壁を飾る手法は、秋田県では羽後町、湯沢市、角館町、青森県では弘前市、黒石市、大畑町、新潟県では新潟市、水原町、紫雲寺町、の町家や漁家に見られる。なお例外的な唯一の報告として、宮城県雄勝町の漁家である永沼家の小屋組に、後掲の佐藤家 (No. 7) と類似した小梁が見られる (佐藤巧: 宮城の古民家—宮城県民家緊急調査報告書—、宮城県教育委員会 1974.3、p.79)。
- 3 高橋浩治: 東北地方日本海沿岸地域に町並みに関する研究、1985 年度千葉大学修士論文。この論文は事例研究で山形県鶴岡市の町並みを扱っており、その中に一部鏡梁についての記述がある。
- 4 土蔵の妻の小屋組のうち、地棟を受けるのに小梁を用いるものが全国的に見られるが、これは鏡梁としては扱わない。
- 5 例えば鏡梁は、北海道ニシン漁場で活躍した庄内出身の青山家の建築で見られる。旧青山漁家住宅 (旧所在は小樽市祝津、北海道開拓の村へ移築保存) や旧青山別邸 (小樽市祝津) の付属屋群がそれで、庄内の大工が北海道での普請で用いたものである。このように小屋組形式は、地域性や大工系統を知る指標になる場合がある。
- 6 鏡梁の分布は広範域に及んでおり、それを正確に把握するのは実際は相当困難である。したがって便宜的に、市町村役場付近で存在を確認する方法を採ったが、結果に大過はないと考えられる。
- 7 参成学校材木横簿、明治 10 年、三瀬村写、豊浦地域史資料、所収、豊浦地域史刊行会、1992
- 8 内訳は山形県遊佐町内 12 人、山形県鶴岡市内 1 人、新潟県荒川町内 1 人である。
- 9 特に名称なし、という人が 1 名いた。
- 10 富樫新三: 木造建築 屋根工法墨付け図解、理工学社、1997、p.10
- 11 前掲、東北地方日本海沿岸地域の町並みに関する研究、p.21
- 12 鍍屋は平成 2～9 年度の間、保存修理工事が行われ、屋敷地が復元整備された。その報告が、財団法人文化財建造物保存技術協会編: 史跡旧鍍屋保存修理工事報告書、酒田市教育委員会、1998、として刊行されている。また資料集として、酒田市教育委員会編: 史跡旧鍍屋保存修理工事報告書 資料篇、酒田市教育委員会、1999、がある。

加えて筆者は、酒田市教育委員会の協力のもとに、この工事中に調査を行う機会を何度か得た。これらの刊行物と筆者の調査をもとに検討を加える。

¹³ 前掲、史跡旧鑑屋保存修理工事報告書、p. 52

¹⁴ 増築部の棟木は当初棟木に載せ掛ける。母屋は新たに当初上屋梁に束立てして増築部へ延ばしている。

¹⁵ 小屋束の正面側に多数残存する和釘痕跡は。その密な間隔から、横張りの壁板を留めたものと見られる。ここから酒田の町家遺構の妻壁に、散見される下見板張りであったと考えられる。なお前掲、史跡旧鑑屋保存修理工事報告書、p. 106、にこの部分の写真と痕跡の説明があるが、板壁についての記述はない。

¹⁶ 前掲、史跡旧鑑屋保存修理工事報告書、p. 90、の現状変更説明。なおこの現状変更によって、座敷は桁行 2 間から 2 間半に改変された。その根拠となったのは、年代不詳、かつ描かれた家も不詳であったものの、鑑屋と比定された市史編纂室所蔵の古図と、発掘調査の結果である。しかし少なくとも現状の建物そのものには、座敷が桁行 2 間半であった痕跡はない。

¹⁷ 前掲、史跡旧鑑屋保存修理工事報告書 資料篇、p. 49、所収

¹⁸ 前掲、史跡旧鑑屋保存修理工事報告書 資料篇、p. 51、所収

¹⁹ 鏡梁は主屋建築から路傍の小屋まで、庄内地方一円で見ることができ、分析対象の客観的な選択は難しいものがある。これらの数から検討をうんぬんするのは如何か、と批判する向きもあろうが、現時点で筆者が実証的に取りまとめられるのが、本稿で扱った遺構

である。これ以上は今後の課題としたい。

²⁰ 洋小屋との組合せでは、このほかに重要文化財旧風間家住宅（鶴岡市・明治 29 年）で、チュウモンとミセ妻壁に鏡梁を重ねた和小屋を造り、内部小屋組はキングポストトラスを用いている。

²¹ 高橋浩治氏においても、鏡梁は構造的意味もあるが多くの妻面の装飾のために用いた、とする。前掲、東北地方日本海沿岸地域の町並みに関する研究、p. 21

²² 大正期にまとめた自家の沿革誌に明治 14 年の記載があったという。この沿革誌は現在散逸し不明。

²³ 当家については、御船：山形県所在の旧青山嘉左衛門家の建築群について、民俗建築、108 号、1995.11、に詳しい。

²⁴ 青山家主屋の普請は、棟札より石垣家住宅（No. 3）の所在する宮田の大工、土門市郎左衛門によって行われたことが明らかである。

²⁵ 縁板墨書。

²⁶ 口伝だが当主の記憶にある事なので大過はないと考えられる。

²⁷ 玉井哲雄：東日本町家建築の系統的把握のための基礎的調査研究、昭和 61 年度科学研究費補助金研究成果報告書、1987

²⁸ 当地方の近世民家の又首組は、又首内に鳥居状に束と合掌繋ぎを入れるのが通例である。しかしながら又首組には鏡梁は持ちいられていない。かかる又首組と和小屋組との関係解明については、今後の課題としたい。

²⁹ 石垣敬子氏よりの聞き取りによる。管見の限りでも、遊佐町域とその周辺にはこれより古い瓦葺の農家はない。

（2003 年 7 月 8 日原稿受理，2003 年 12 月 11 日採用決定）